

〈共同研究報告〉

「総合雑誌『太陽』の総合的研究」

中間報告——その三 序

鈴木貞美

小田三千子論文は、創刊期『太陽』の英文欄を担当した、明治期の「英語名人」として知られる神田乃武について、「太陽」

英文欄記事を中心に、その生涯と仕事を閲歴し、広い意味での英学者としての実像を定着するレポート。

佐藤バーバラ論文は、「家庭」という觀念が浸透する時期にあたって、『太陽』家庭欄が男性読者向けの性格をもっていたこと、その「家庭」像、近接する時代の女性雑誌との比較などを簡明にレポートする。

三谷憲正論文は、『太陽』誌上に現れる対朝鮮觀を広くさぐって、その言説のヴァリエーションと変化の相を、日本近代が抱

えた「逆説」を明らかにするという立場から浮き彫りにする。

林正子論文は、「中間報告——その二」に掲載した『日清・日露両戦役間の日本におけるドイツ思想・文化受容の一面』に連なるもののひとつで、高山樗牛の思想的変遷に新たな照明をあてる。

なお、本共同研究は平成八年で一段落し、平成九年度からは新規のメンバー多数の参加をえて、「大正期総合雑誌の学際的研究」と題して、日露戦争後の『太陽』『中央公論』などの記事の比較検討を中心とし、さらにメディア研究など多角的なアプローチを加えている。しかし、前期の『太陽』を

めぐる共同研究の中間報告がこれで出揃ったわけではない。今後は、引き続き明治期『太陽』をめぐる中間報告と、新規の共同研究の中間報告とを、「大正期総合雑誌の学際的研究」の中間報告というタイトルの下に掲載する予定である。